一中だより

令和８年１０月２日 発行　 第６号
新潟市立新津第一中学校
電話 0250 (22) 3622　FAX 0250 (22) 6407
HP http://www.niitsu1jh.city-niigata.ed.jp/



～体育祭～

９月１７日（木）に体育祭を実施しました。今年度のスローガンは「青瞬謳歌（せいしゅんおうか）」。年に一度の一大行事に向けて、生徒たちは夏休み前からその準備や練習を行ってきました。当日はその成果が十分に発揮され、応援・競技・パネル・式典の各部門で様々な生徒の活躍が見られました。特に、競技で異なる学年の生徒を一生懸命に応援する姿や、応援合戦の発表後に他の連合から送られた拍手に心を動かされた方も多かったのではないかと思います。生徒が体育祭を自分たちの手で創ろうとしてくれたことに成長を感じました。また、今年度は保護者の方や地域の方と一緒に創り上げる行事にしたいという生徒の思いから、特別賞「The Best Spirit」を創設し、参観者の皆様からご投票いただきました。計２６０票が集まり、競技・応援・パネルをはじめとする生徒の取組について、感動したことや生徒への励ましなど、多くの感想をいただきました。ありがとうございました。

この体育祭での経験を自信に、生徒たちが今後より一層成長してくれることを願っています。

お忙しい中ご来場いただき、生徒に温かいご声援を賜りましたご来賓の皆様、地域の皆様、保護者の皆様に心より感謝申し上げます。

赤連合



青連合



黄連合

















参観者の方から寄せられた「体育祭で一番印象に残った瞬間」（抜粋）

全員リレー：「ハプニングがあってもお互いに声を掛け合って、ゴールした後に駆け寄る姿が素敵でした」
パネル：「圧倒的な迫力とデザイン力！」「パネル長の説明が素晴らしい！連合への気持ちも伝わり良かった」
応援合戦：「みんな音楽に合わせて声が良く出ていたし、踊りも一生懸命だった」
大玉送り：「３年生を中心にとても団結していた。大玉が落ちても、大丈夫！いける！と声をかけ合っていて良かった」
等、多数のコメントをいただきました！

最後の解団式では、３つの連合がそれぞれ互いの健闘を称え合いました。



【体育祭の結果】

	応援の部	パネルの部	競技の部		特別賞「The Best Spirit」
最優秀賞	赤	黄	１位	黄	黄
優秀賞	青・黄	赤・青	２位	青	
			３位	赤	



広島平和記念式典等派遣事業

新潟市では平和推進事業の一環として、毎年、広島市で開催される広島平和記念式典等に市内の中学生を派遣しています。今年度は、当校３年生の高橋凛さんを含めた市内の中学２・３年生 24 名（公募により選出）が派遣されました。

高橋さんが現地で見て、聞いて、感じたことをまとめた感想文を掲載いたしますので、戦争の悲惨さと平和の尊さを改めて感じていただくとともに、戦争の記憶や事実が風化することなく、平和への願いとともに後世へ語り継がれていくことを願います。

当たり前という奇跡

高橋　凛

81 年前、8 月 6 日午前 8 時 15 分。学生たちは建物疎開作業に従事していました。空襲警報は既に解除され、その平穏な朝は、原爆という一つの兵器によって、一瞬にして奪われました。

私が強く印象に残っているのは、被爆体験講話で聞いた話です。当時 8 歳だったその方は、窓がピカーっと青白く光った後気を失い、目を覚まして外に出ると、大粒の黒い雨。逃げてくる人達の姿は、幽霊のようだったといいます。髪の毛は逆立ち、全身大火傷を負い、めくれた腕の皮膚が手の指先にボロ布のように垂れ下がっていました。別の講話でお話されていた方も、人々をお化けのようだったと表現していました。違う場所で違う状況で被爆した 2 人が、揃って人ならざるものに例えていたことに、あの日の光景がどれほど現実離れしていたのかが表れているように感じ、私はゾッとしました。

幽霊のようだったという言葉を聞いても、私はまだどこかで、それを自分とは遠い出来事のように感じていましたが、その認識は、資料館でこれでもかというほど思い知らされることになりました。

そこにあったのは写真や絵だけではありません。被爆して亡くなった方が実際に着ていた服、その人の名前や顔。展示されていたある子供の服は、くたびれていて、ずっと小さかったです。「当時の学生はみんな栄養不足で、体が小さかった」――講話で聞いたその言葉が、ふいに蘇りました。

今、私たちが当たり前だと思っているものは、当時の子どもたちがどれほど望んでも、決して手に入れることのできなかった自由なのかもしれません。

核兵器は今も世界中に存在し、戦争によって当たり前が奪われ続けている国や人々が今もいます。では、なぜ戦争は起こるのでしょうか。自分の国の利益だけを考え、話し合う前に力に頼ってしまうからではないでしょうか。だからこそ私は、意見の違う相手の話にも耳を傾け、この 3 日間で見たことを風化させぬよう、これからの世代に伝えていきたいです。それが、今の私にできる、平和への一歩だと思います。